

活動報告書



中国河北省北部大地震緊急救援活動

1月16日から開始された中国河北省大地震緊急救援活動。会員の方々やすぐさま義援金をお送りいただいた皆様のご支援によって、被災区域の人々の救援活動を直ちに実施することが出来ました。この場をお借りし改めてお礼を申し上げるとともに、去る3月31日から行われた現地視察の模様をご報告させていただきます。

SVAでは4月一杯を目処として本救援活動を終える予定ですが、それまでの間、春先にかけて現地で進められていく復興のための活動に協力していく予定です。

背景

人口約12億とも言われる大国中華人民共和国は、現在もその約5%とも言われる約6,000万人の極度な貧困者を抱えています。また、全国に散らばる軍事施設などの関係から、たとえその周辺にそうした貧困者たちが存在していても、当局の許可なしにはなかなか地域に立ち入れないと言う現状があります。

今年1月10日に中国河北省北部で起こった大規模な直下型地震の被害は、まさにこの二つの条件が重なり合う地域で起こりました。しかも気候や土壌など極度に生活環境の厳しい地域です。首都北京市から北西約250~350キロ地点に広がる内蒙古にほど近い村々で、ほとんどの被災者が牛、豚、山羊などの家畜や麦などを栽培する農民たちでした。

特に張北県（日本でいえば郡または市にあたる行政区）周辺が最も酷かったとされています。例えば、県内にある8町76カ村において80%もの家屋が倒壊するといった具合でした。震災が昼前・午前11時50分に起きたため、死傷者の数は予想以上に少なかったものの、ほとんどの村が壊滅状態であり、病院や学校などといった公共施設もほとんど全壊状態でした。このため、被



災者の人々は極寒の中、仮設テントでの不自由な生活を強いられることになりました(死者 50 名、負傷者 10,187 名―内、重傷者は 1,252 名、被災家屋 284,469 家屋、住居損失者 130,660 家屋、直接的な経済被害総額 23 億 9 千万元)。

SVA は、震災後直ちにスタッフを現地に派遣し、中国では最も信頼のおける救援活動

機関である中国紅十字会をカウンターパートとしてこの事業に取り組むことにしました。前述の通り、第一回目の調査では被災地には入れずに情報収集のみしかできませんでした。が、緊急救援から復興活動へと作業が進む中、短期間ではあったものの今回は直接被災地を訪ねることができ、SVA の協力が緊急救援に役立ち、今後は復興事業へと生かされていくことを確認することができました。



被災区域は、今

●河北省张家口市（県）張北県ウトウゴ村およびウランゴ村

ウトウゴ村： 約 500 世帯、1,600 人の村ですが、村全体が壊滅状態。死者は 1 名しか出ませんでしたが、家屋が倒壊したため仮設テントで住民は暮らしています。田福さん

という一家 3 人のテントを訪問しました。食糧は配布されたものなどもあって、ほぼ足りていました「とにかく家を再建したい」と語っていました。ちなみに中国では一家族の数は一人っ子政策で極端に少なくなっています。



ウランゴ村： 39 世帯、108 人の小さな村。中国には、政府によって作られた行政村と先住的に



存在する自然の村とがありますが、この村は後者。ここも全壊状態で、村毎約 500 メートルほど離れたところに移転する計画を進めていました。幸い死者は出ませんでしたが、重傷者が 2 名と軽傷者が 30 名出了ました。任玉華さん（73）のテントをお邪魔すると、「わざわざ遠いところから訪ねてきてくれてありがとう」と私たちに感謝の意を示されました。彼女は震災で生き埋めになり、顔や手を負傷しました。「顔から血が出ているのがわかった。これまで一度も経験のないことで、とても恐ろしくて震えていました」とその時の様子を語っていました。

●河北省张家口市（県）張北県（市または郡）单晶河郷（町）梅茂村

单晶河郷病院： 14 カ村（人口約 17,000 人）の病院で、医者が 3 人、助手や看護婦が 20 人。この病院自体も倒壊し、仮設テントの中で治療に当たっていました。ここでは 14 人が震災で死亡、650 人が重軽傷を負いました。現在は、寒さから来る風邪などの患者が一番多いようですが、薬や医療機器が不足しているとのことでした。再建には、香港赤十字などが協力していました。

梅茂村： 世帯数 266、人口 736 人の村。高齢者が目立ちました。こここの村では、SVA の救援物資の一部である防寒用のセーターを配布しました。その後、仮設テントの小学校を訪問。子どもたちの数は、約 50~60 人。校舎は損壊が激しく、使用できない状態に置かれていました。しかし、子どもたちは明るい表情で国語の授業を受けていました。



SVA の協力

中国紅十字会国際部長の楊会新氏によると、緊急救援活動に関してはほぼ終了し、今後は病院や学校などの公共施設やインフラの整備、そして被災家屋の再建に取りかかる予定とのことでした。実際、私たちが訪問した村々にはレンガが運ばれ、堆く積まれてい

ました。また、地域を回っている途中にレンガなどを満載した何台ものトラックとすれ違いました。4月にようやく入ったといえ、日中でもマイナス5度前後のため、復興はなかなか進んでいません。「おそらく8月から9月頃までには大分復興するだろう」と関係者たちは語っていましたが、被害が余りにも大規模であり、復興計画も多岐に渡っているため、疲労の様子がうかがえました。ちなみに、人民軍は救援活動を終了しており、復興については行政や民間の手にゆだねられているとのことでした。

SVAは、これまでに多数の協力者から義援金をいただき、中国紅十字会を通して3回（計1,100万円）に渡って協力してきました。この4月中旬には最後の送金を行う予定です（約400万円）。義援金の使途は、防寒具、食糧、医薬品など緊急救援用物資の購入として第1回目が使われ、第2回目以降は復興支援として被災者5,000名分の予備食糧購入費、病院や学校の再建のための資材購入費及び医療機器の購入などにあてられる予定です。今活動に際しご協力いただいた皆様、大変ありがとうございました。



本救援活動に関するお問合せ：

〒160-0015 東京都新宿区大京町31 2・3F

SVA（曹洞宗国際ボランティア会）東京事務所

担当：関 尚士

TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220

SVA（曹洞宗国際ボランティア会）とは...

1979年12月に発足した曹洞宗東南アジア難民救済会議（JSRC）が前身。1980年3月から現地で活動を開始し、翌年10月、SVA・曹洞宗国際ボランティア会に改組しました。当初、タイの難民キャンプで教育・文化支援を中心に図書館、印刷、出版活動を続け、その後、難民キャンプの閉鎖に伴い、活動をタイ、カンボジア、ラオスの国々の地域開発、復興協力へと移行しました。現在、タイではバンコクのスラムや東北タイ・北タイで協力活動を行い、ラオスでは教材開発、図書館支援活動、小学校建設を行っています。そしてカンボジアでは、復興協力活動として小学校建設や職業訓練センターの運営、図書館活動への支援を行っています。また、95年1月に起きた阪神淡路大震災直後から、神戸市内に拠点を設け、救援・復興支援活動に取り組んできましたが、97年4月からは神戸事務所を閉鎖し、後方支援という形で現在も活動を行っています。なお、97年6月から北朝鮮の緊急食糧救援にも取り組みはじめています。